
ラブカクテルス その7 9

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その79

【Nコード】

N9930E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は隠している心の隙間に沁みるカクテルです。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は不幸欲でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は恵まれている。

決して有り余る程の資産などがある程ではないにしろ、子供の頃から何不自由なく育てられ、身体も五体満足、その産んで育ててくれた両親でさえも申し分ない。

私の事を可愛がり、愛し、心配してくれる家族。

食事だって毎日三度、三時のオヤツにたまには夜食だって出だし、流行りの玩具や服装などのファッションだって、それはいくらでもという訳にはいかないにしろ、揃えてもらえる環境には不満なんかない。

不満なんて。

でも、でも怒る人は勿論いるのはわかっているのだが、いや、恵まれた暮らしに文句など言う訳では更々ないのだが、憧れてしまうのだ。

悲劇のヒロインに。

誰でもそうでないだろうか？

特に女性はそうなのかも知れない。

たからその証拠に昼の連ドラには不倫を始めとする波乱に満ちた人生や恋愛話が多いし、サスペンスなどの殺しが絡むほどの不幸な話には大抵の女性は釘付けになり、いつの間にか感情移入し涙を流してしまう。

しかし私はそれだけでは飽き足らない。

無いものネダリのようになぜだか突然、自分の今いる環境を壊したくなる。

刺激欲に似ているのか、いや、特別扱いされる優越感欲なのだろうか？

しかし今の自分には確かに、そんな事ばかりの筈がない不自由の中の苦しみ、偏見や差別、したくてもできない悔しさや、言いようのない挫折、それら以上にあるであろう色々な目に見えない壁なんて体験していないのだから当然わかっていない。

しかし、私にはなぜかそれらが美しく輝いて見える。

底の底から這上がってくる者達だけが味わうことを許される苦労や、それによって光る汗や涙。

考えただけで背筋がゾツとする程懂れてしまうのだ。

しかしそんな事は非難されて当然の思想。

誰にも言い出せない私の心の中の秘密だ。

しかし、しかし今の時代、秘密は一人で抱えていなくてもよくなつたと言えた。

そう、それはネットでの独特な思想の共有をできる場所。それを手軽に使えるお陰だと言えた。

検索から同感できる相手を探して、もしくはそういう場所を自分から作り、語り掛けるかなのだが、私の場合は前者であった。

何気なく暇つぶしのつもりでふと、キーを叩いてしまっただけだったが、簡単にヒットしたそのサイトは、覗けば覗く程私を唸らせる

内容のもので、それにのめり込んでいくのに時間は掛からなかった。サイト管理人や、そこに度々姿を見せる会員達との話は、私が押し殺していた熱い胸の内をみるみる開放しだし、そしてその快感を求めて毎夜毎夜そのサイトに顔を出す私はすぐに常連の一人となったのだった。

本当の名前や顔も知らない人達。

だが、私にはそれがかけがえのない理解者であり、友人であり、そして仲間となった。

そしてそこで想像する自分の憧れである不幸な場面を書き込んだら、それに返ってくる答えを真剣に対応して、逆に他の意見や、その不幸の内容に感想を書き込みそれを繰り返しながらもし、現実にならなったらの別世界の自分にたっぷりと浸かる、そんな特別な時間をただただ当たり前の習慣として受け入れる自分。

そして何だかこの頃やけにふっ切れてきて、性格まで少し変わってきた気がする私は、その内段々とそれを本当の事としなくなっている衝動を抑える事に無理を感じ始めてきて、止めたくても止められない欲求にズルズルと引きずり込まれていく、しかし助けを呼ぶ気などはさらさら起きない事に恐さを感じながらも頭の中では着々と、どんな不幸を味わおうかとそればかり考えている日々を過ごしているのだった。

しかし人間、ずるい事にそんなことを言っているくせ、傷つくことには臆病である。

ましてや一回味わって駄目なら、元に戻る保険が欲しいなどと都合のよい事までも、裏では考えている。

そしてその内、私はただ想像で楽しんでいただけのサイトでの色々な不幸を自分に当てはめてみては、それについてのリスクや最悪の場合の修正方法を検討した

し、品定のように憧れへの実現に向けてゆっくりと動き出したのだった。

しかしある日、いつものように悲劇のヒロインが主役の映画を見ていてふと思った。

この女優さんは何だかいつもこんな役が似合う。まるで不幸のオンパレードを体験しているエキスパートみたい、

ハッ！

そうか！

そんな都合の良い話が実際にあったなんて。

そう。私はこの時にそんな理由で女優を目指すことにしたのだった。幾つかの劇団の芝居に顔を覗かせては売れている女優を研究しながら、タレント学校にも通い出し、私は悲痛の表情を毎日鏡に向かつて作り出しては、ネットで得た色々な不幸なケースを想像し、それを演技にも惜しげなく披露することで、段々と噂が噂を呼んで、それが関係者の耳にまで入り込み、やがて小さなものだったが役というものが回ってくるようになった。

始めは単純に、ただの殺人者の犠牲となるOLや、捨てられる不倫相手のちよい役から、強盗に拳銃をつきつけられる銀行員、そしてホラー映画で絶叫し、殺されて化けて出る恨めしい幽霊。

しかしそれらの演技はどれも私には楽しくてたまらなく、それが一層見ている人達には何かを印象付けるらしく、その結果私は業界で認められ出した。

そしていよいよ台詞のある役がつき、台本も手渡されるようになる、と、周りからの扱いも段々と変わり始めた。

そしてそれから一年もしないうちに大手のタレント所属事務所からのスカウトが何ヶ所からくるようになると、オーディションをしなくても指名で役が付くようになっていき、そして私はそんな不幸な役を精一杯演じきればきるほど評価は最高潮、拳句の果てにはいよいよ私は悲劇のヒロインの主演を演じる事となった。

それは人生の始まりから終わりまで不幸三昧という夢のような役。私は稽古の時は勿論、普段の生活の中でもその役の感情をいつも以上に自分にインプットしては、熱くなる胸の高鳴りを楽しみ、これ

よりないというくらい不幸な表情を静かに光らせた。

そしてその涙は私を確固たる女優の地位へと導き出し、いつの間にか知らない人がいない程の不幸が似合うナンバーワン女優として、順調な生活を送り出した。

しかし私はなぜかそれに満足していない事に少しずつ気づき始めていた。

そう、演技以外の自分の幸福すぎるこの生活。

不幸で成功すればする程私は、幸せになっていくその反比例な心の内側。

また、無いものねだりの自分が始まった。

それにため息を吐くつつ、それでも不幸を演じ続けるしかない自分が、実は不幸で不幸で

しょうがないのだと言い聞かせるしかなかったのだった。

そして次に回ってきた、この頃ではありふれていた不幸な役。

私はまあいいかと、軽い気持ちでそれに挑んだが、実はそこには衝撃的な運命が待っていた。

あるシーンのセット。

私はその時、一人で苦悩に嘆く悲しみの絶頂を迎えた主人公を熱演していた。

しかしそんな中、突然大きな音がしたかと思うと、そのシーンを照らす照明が私に向かって倒れてきたのだった。

私はその下敷きになっただけでなく、地面に倒れ込んだ。

周りのスタッフ達が必死に声を荒らげて自分の名前を呼んでいたのは少し記憶に残っていたが、しかし次に私の記憶としてあるのは病院の個室の風景だった。

それからしばらくはその話題が世間を賑わせているらしく、テレビのワイドショーや、芸能向けの雑誌などは、どれを取ってもその時の惨劇をメインに報じていた。

私は力なく、そんなマスコミの反応を楽しみ、まさにプライベートまでが悲劇のヒロインになれた事を静かに喜びながら、それを人前

では見せないようにと苦労した。

怪我の方は、お医者様の話からすると、少し時間が係るかも知れないが、安静にさえしていれば大した事はないそうだ。

私は少しの間ではあるが、自分が本物の悲劇のヒロインになれたことに満足しながら、このところ忙しいスケジュールで働いていたことへの、身体休みの休暇だと考えを置き換え、その今の境遇を満喫することにした。

しかし、人の噂もなんとやらとは言うが、私を襲った悲劇は、その2日後にはテレビにも雑誌にもその話題を消し、そして3日目にはそんな事があつたのかと言わんばかりに忘れ去られる勢いだつた。私は思った。

悲劇のヒロインなんてこんなものかと。

5日もベッドに横になった私は、段々とそんな毎日に暇を持て余すようになり、早く役者としての私に戻りたいと思うのだつた。

しかし今度役を演じる時は、この気持ちを活かして依然よりももっと深みのある演技をしてみせる。

それに、そろそろ違ったイメージで、今度は幸せ溢れる役なんていうのも、、、

ねえ、聞いた？例の個室の役者さん。

彼女、打ち処が悪かったらしくて、一生車椅子になってしまつたそうよ。

それでね、事務所の方の強い要望で、彼女にはそれを暫く知られないようにしたいって言うことで、ドクターもそれはそれは練習して、迫真の演技で嘘の告知を

したらしいけど、いつかは本当の事を言わないといけないでしょ。

彼女、役意外でも本物の悲劇のヒロインになってしまったわ。

可哀想に。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9930e/>

ラブカクテルス その79

2011年10月4日10時00分発行